

# 哲學研究

第二十四號

第三卷  
第三冊

## 輪廻轉生と解脫

齋藤 唯信

257

凡そ原因あれば必ず結果のあるべきことは、普通一般の眞理でありて、一の原因として結果の之に伴はぬもの無く、又一の結果として原因の之に伴はぬものはない、若し原因ありて結果なく、又結果ありて原因無いならば、古來之を有因無果又は無因有果の邪説と稱して、眞正なる因果の法則に合せざるものとすることである、然るに吾人現世に善を爲すも善果を受くることなく、又惡を行ふも其報を受けずして一生を終ることがある、此如き場合は、善因にして善果無く、惡因にして惡果無くして一生を終るものとなすべきか、決して然らざるべし、若し善因にし善果なく、惡因にして惡果無いならば、是れ則ち因果の法則に背反せるものでありて、有因無果の邪説たるに外

かならぬ、それ故苟も善因あらば、設ひ此世に其果を招かずとも、來世必ず之を招き又此世に惡因あらば他世必ず其報を招かねばならぬ、是れ唯現在一世の上に因果の法則を説くばかりでなく、廣く過去現在未來の三世に涉りて、其應報を論せねばならぬ所以である、輪廻轉生説の起るのも、實は此でありて、若し原因にして迷を翻して悟りに至ること能はざるならば、因果の法則に支配せられて、恰も車の輪の廻るが如く、此に死して彼に生れ、彼に死して此に生れ、輪廻轉生止まないことである、その止むことなき者をして、如何にして解脱せしむることを得るか、是れ甚だ重大なる問題でありて、宗教の依りて起る所以も、亦茲に存することである、依て今且らく佛教に於ける輪廻轉生と解脱と題して、少しく其一斑を述べやうと思ふ、これ併ながら今新に之が研究を試みて述べんとするでなく、從來思考する一端を擧て、此問題に應じやうとするのである。

## 一 輪廻轉生の主體

原因結果の法則に支配せられて、此に死して彼に生れ、彼に死して此に生るゝ輪廻轉生の主體何ものなるか、これ此輪廻轉生と解脱を述ぶるに就て、先づ以て解決せぬ

ばならぬ問題である。凡そ佛教には、小乗教あり大乘教あり、其小乗教は、佛滅後凡そ一百年間は、法燈一味でありて、異計無かりたけれども、一百年已後、上座大衆の二大部と分れ、其後上座部の中より、雪山部、薩婆多部、犢子部等の十一部を分出し、又大衆部の中より、根本大衆部、一説部、説出世部等の九部を分出せし事は、宗輪論等に詳に記する所でありて、之を小乗二十部と稱する事である。就中佛滅後凡そ三百年中、上座部より分出せる薩婆多部では、吾人が過去より現在、現在より未來と展轉繼起相續するは、これ煩惱と業との力に依るものでありて、過去世に現在世の果報を招くべき業を造る、其業はその將に一生の終らうとする時に臨み、發動して今世の身心を招く、今世の身心に於て、又更に種々の業を造る、其種々の業力によりて、其將に此世を終らうとする時に臨み、其業力は活動して來世の身心を感得することである。然れば輪廻轉生の主體は、此業力の活動以外に、別に主體を求むるの必要なく、即ち業の力によりて、此に死して彼に生れ、彼に死して此に生るゝものとするのである。故に俱舍論九七丁に曰く、

外道執我者言、若許有情轉趣餘世、即我所執有我義成、今爲遮彼、頌曰、

無我唯諸蘊、煩惱業所爲、由中有相續、入胎如燈焰、如引次第增、相續由惑業、更趣於餘趣、故有輪、無初、唯有諸蘊、謂唯於蘊、假立我名、非所遮遣、若爾應許諸蘊、即能從此世間、轉至餘世、蘊剎那滅、於轉無能、數習煩惱業所爲、故、今中有蘊相續入胎、譬如燈焰、雖剎那滅、而能相續、轉至餘方、諸蘊亦然、名、

轉氣失故離無我而由惑業諸蘊相續入胎成云云

然るに其後薩婆多部より分れ出たる犢子の一派では、一切諸法を總括して三聚とし、或は五法藏として、輪廻轉生の主體を、普通云ふ所の身心以外に立つるに至りたことである、其所謂三聚とは、有爲聚、無爲聚、非二聚でありて、有爲聚は生滅變化するもの、無爲聚は生滅變化せざるもの、非二聚は生滅變化する有爲でもなければ、又生滅變化せざる無爲でもないものをさすのである、五法藏とは過去藏、現在藏、未來藏、無爲藏、不可説藏でありて、此中過去現在未來の三藏は生滅變化するもの、無爲藏は生滅變化せざるもの、不可説藏は生滅變化するとも生滅變化せるとも説くことの出来ない一種不思議のものである、此三聚の中の非二聚、五法藏の中の不可説藏はこれ即ち輪廻轉生の主體でありて、若し此主體が無いならば、吾等は過去より現在、現在より未來に至ること能はざるものとするのである、それ故宗輪論に此事を述て曰く。

諸法若離補特伽羅、無從前世轉至後世、依補特伽羅可説有移轉。

宗輪論述記七十に之を釋して曰く、

其犢子部、謂補特伽羅、非即蘊離蘊、謂實有我、非有爲無爲、然與蘊不即不離、佛說無我、但無即蘊離蘊、如外道等所計之我、悉皆是無、非無不可説、非即蘊離蘊、我既不可説、亦不可説、形量大小等、乃至成佛、此我常在、

又其後薩婆多部より分出したる化地部では、輪廻轉生の主體として、窮生死蘊なるものを立てた、此窮生死蘊は、設ひ自己身體や普通云ふ所の心が無くなりても、間斷することなく、生死の二際に涉りて、滅亡せないから、此に死して彼に生れ、彼に此して此に生るゝことが出来るのであるとするのである、故に大乘成業命新藏竭三十七に曰く、

大衆部經名二根本識化地部說窮生死蘊

蓋し此部に於ては三蘊と稱して、一に一念蘊、二に一期蘊、三に窮生死蘊の三種を立つる事でありて、此中一念蘊とは、念々刻々生滅するもの、一期蘊とは、生れてから死に至るまで、恒に隨轉するものでありて、吾人の身體の如きもの、窮生死蘊は、菩薩が修行成就して、今將に佛果菩提の證りを開かうとする金剛喻定に至るまでの間、恒に隨轉する法である、化地部では既に窮生死蘊なるものを立つるから、吾等が輪廻して、此に死して彼に生れ、彼に死して此に生るゝとも、其間斷絶することなく、生死相續するものとするのである、又其後即ち佛滅後四百年の初に、薩婆多部より分出したる經量部に於ては、細意識なるものを立て、輪廻轉生の主體とすることである、尤も經量部に本經部末經部がありて、本經部では、有情には身體と心との二の中、何れか其一有るべきであるから、設ひ身體が無くとも心があれば、其心に善惡業の種子を保持し、又心

が無くとも身體があるから、其身體に善惡の種子を保存すと説きて、色心互薰論を立つるが、未經部では別に生死相續する一種の心ありとして、細意識を立つることである、此細意識を、宗輪論に一味蘊と名けてある、宗輪論述記<sup>九丁</sup>に其一味蘊を釋して、

一味者、即無始已來、展轉和合而轉、即細意識、曾不間斷、此具四蘊、有根邊蘊者、根謂向前細意識、住生死根本、故說爲根、由此根、故有五蘊起、即同諸宗所說五蘊、然一味蘊、是根本故、不說言邊、其餘間斷五蘊之法、是末起故、名根邊蘊。

と云ふてある、此に依れば細意識は無始已來相續して滅せざるから、輪廻轉生の主體であるとするのである。

又佛滅後二百年に、大聚部より分れ出でた説假部では、有分識といふものを立て、輪廻の主體なりとして居る、故に成唯識論<sup>三二丁</sup>に

上座部經、分別論者、俱密說此、名有分識、有謂三有、分是因義、唯此恒遍、爲三有因、

此の文の中上座部經とは、上座部の中で經を以て量とする經量部のこと、分別論者とは説假部のことである、此のごとく小乗教では、輪廻の主體を説かんとして、或は不可説藏なるものを立て、或は翳生死蘊を立て、或は一味蘊、或は有分識等を立つるに至る。

然るに更に轉じて大乘教を見るに、大乘教では八識と稱して、吾人の精神界の主な

るものを眼、耳、鼻、舌、身、意、末那、阿頼耶の八識に分ち、其中眼耳鼻舌身意の六識は、普通事理を識別する心でありて、即ち眼識は色を見、耳識は聲を聞き、鼻識は香を嗅ぎ、舌識は物を味ひ、身識は冷暖を覺知し、意識は内外百般の事理を了別する心である。末那識は恒に内に向て我れか我れかと思量する心である、而して阿頼耶識は末那識の爲めに、我れか〜と思はるゝ思はれ手である。此思はれての阿頼耶識は、過去より現在、現在より未來と繼續して、暫くも斷絶することがないから、今吾人が輪廻轉生する主體何ぞといへば、此阿頼耶識なりとするが、大乘唯識の教である、而してその阿頼耶は印度の語でありて、支那語に譯して藏といふ、吾人善を爲せば其善因を、惡を爲せば其惡因を、阿頼耶識即ち吾人の主體に保存して失はぬから、藏と名くるのである、要するに吾人に阿頼耶なるものありて、其阿頼耶が過去より現在、現在より未來と繼續するから、吾人命終る時、自己の肉體と普通云ふ所の心とは滅し去りて無くなりても、自己の主體は斷滅せず、未來に其生を受くるものとするのである、故に大乘成業論に曰く、

能續<sub>二</sub>後有、能執<sub>三</sub>持身、故說此名阿陀耶識、攝<sub>二</sub>藏一切諸法種子、故復說名阿頼耶識、前生所引業、異熟故、即此亦名異熟果識、若不<sub>レ</sub>許、有<sub>二</sub>此異熟識、復有<sub>二</sub>何識、能執<sub>三</sub>持身、非有<sub>二</sub>餘識、能遍<sub>三</sub>持身、乃至命終、恒不<sub>レ</sub>捨云云(新藏講七十一丁)

## 又成唯識論二丁に曰く

阿頼耶識爲斷爲常、非斷非常、以恒轉故、恒謂此識、無始時來、一類相續、常無間斷、是界趣生施設本故、轉謂此識、無如時來、念々生滅、前後變異、因滅果生、非常一故、可爲轉識、熏成種故、恒言遮斷、轉表無常、猶如暴流、因果法爾、如暴流水、非斷非常、相續長時、有所漂溺、此識亦爾、從無如來、生滅相續、非常非斷、漂溺有恃、令不出離、

此の如く大小乗教に、輪廻の主體に就て異説あるも、要するに普通云ふ所の身心以外に主體を立てやうとすると、立つる必要なしとするに歸することである、即ち薩婆多部の如きは、立つる必要なしとする説でありて、其他の前述の諸部は、別に之を立てんとするのである、此に就て一の不審が起き來る、それは元來佛教は無我説である、無我説であれば、普通身心以外に、輪廻の主體を立てるが如きは、自我撞着でないか、然るに前述の大小乗教の多分に、之を立てんとするは何ぞやと云ふことである、併しこれは畢竟無我と云ふ語に拘泥せるより起き來ることでありて、元と佛教に無我といふは、我にも種々ありて、支那唐の華嚴宗の大德賢首は、自著の探玄記に、我を分ちて四種としてある、一に執我、二に假我、三に自在我、四に眞我である、此中執我とは、迷情を以て常住なる實我ありと固執する我である、假我は身心和合の上に、假りに我と稱する名を立てるもの、自在我とは其體無漏の智慧でありて、無漏の智慧には自由自在の德

用があるから自在我と名くるのである、真我とは真如で真如には常樂我淨の四徳を具て居るから、絶待の眞如をさして眞我と名けたのである、今佛敎に無我と稱して我を排斥するは、執我の一を指すのでありて、假我でもなければ自在我でもなく又眞我でもないことである、唯排斥せないのみでなく、自在我や眞我の如きは、最も尊重し要求すべきものでありて、釋尊は寧ろ吾人に對して、速かに其自在我を廢して、眞我の域に到達すべしと勸めらるゝことである、然れば輪廻轉生を説きつゝ、而も無我を主張するは、畢竟凡夫の迷執する實我の存在を否定して唯己れあるを知りて他を顧みざる利己的精神を撲滅せんとせらるゝのであるから、無我といへつゝ、而も輪廻轉生の主體を説くも、毫も怪むに足らぬことである、大乘成業論に曰く、

何緣不許我體實有、與云識身爲所依止、汝所執我、其相云何、而說能爲六識依止、若許我如阿頼耶識、生滅相續、隨緣轉變、與識何殊、而執爲我、若執我體是一、是常、畢竟無變、如何可說受識等熏爲所依止云云(新藏謁七十二丁)

昔支那東晋の世に慧遠法師あり、自著の神不滅論の中に、輪廻轉生の主體の滅せざることを示すに、一の譬喩を擧て、人をして知り易からしむ、其文に曰く、

火之傳於薪、猶神之傳於形、火之傳異薪、猶神之傳異形、前薪非后薪、則知薪窮之妙術、前形非后形、則悟情數之感深惑者、不得見形朽於一生、使以爲謂識神俱喪、猶火窮於一木、乃曰終期都盡矣、惑

者見形朽<sub>二</sub>於一生<sub>一</sub>、便以爲<sub>二</sub>神情俱喪、猶觀<sub>二</sub>火窮於一木<sub>一</sub>、謂終期都盡耳（縮刷錄七十五丁）  
 是に由て之を觀るも、吾人が如何に過去より現在、現在より未來と輪轉して止むことなきか知らるゝことである。

## 二 輪廻轉生の動力

然るに其主體をして、此處より彼處、彼處より此處と輪廻せしむる原因何者なりや、否主體其者を動かす動力となるもの何ぞと云ふに、これには主體を動かす動力必ず無くてはならぬ、彼の汽車が東より西、西より東と轉々動くは、其車を動かす石炭蒸汽の力あるによるが如く、吾人をして此に死して彼に生じ、彼に死して此に生れしむる動力のあるべきは當然である、然るに此動力に就て、大體を觀するに、二種に分つことが出来る、其一は惑にして他の一は業である、惑は精神的のものでありて、此に又二類と分る、一を根本惑といひ二を枝末惑といふ、根本惑は迷の結果を感得する根本なるものでありて、枝末惑はその根本惑に隨從して起き來る煩惱である、故に前を本惑とも云ひ後を隨惑とも稱することである。

其所請根本惑とは、俱舍論十九<sub>丁</sub>初に、

隨眠諸有本、此差別有六、謂貪瞋亦慢、無明見及疑、論曰、由此隨眠、是諸有本、故業離此無感有能、何故隨眠能爲有本、以諸煩惱現起能爲十種事故、一堅根本、二立相續、三治自田、四引等流、五發業有、六攝自具、七迷所緣、八導識流、九越善品、十廣縛義、令不能感自界地、故由此隨眠能爲有本、故業因、此有感有能、此略應知差別有六、謂貪瞋慢無明見疑云云

とありて、略して六種としてあれども、開けば十種となる、即ち貪、瞋、痴、慢、疑、惡見の六種の中、第六の惡見を開きて身見、偏見、邪見、見取見、戒禁取見の五種とし、前の五と合して十種とすることである、此中第一の貪は貪愛でありて、物に染着して貪求する心、第二の瞋は瞋恚でありて、能く無瞋を障て不安と惡行の所依となるもの、第三の痴は愚痴でありて、宇宙萬物の事理に闇昧なる心である、第四の慢は、他に對して心自ら高擧するを云ひ、第五の疑は、不疑の善根を障て、迷悟因果の道理に猶豫する性である、第六の身見は、此に我見と我所見とありて、我見は吾人の身體は五蘊積集と稱して、物心の聚合物である、此聚合物に對して、實に常一主宰なる我身ありと迷執する妄見、我所見は所は所屬で、他物を我身に屬する見である、一切の事物は、其體如幻假有でありて、實に自他の所屬でない、然るに顛倒推度して、彼は我が所有品である、此は我が所有物である等と固執するを我所見と名くるものである、第七の偏見とは、これに斷常の二ありて、斷見は我身は死後斷滅すべしと執し、常見は我は常住なるべしと偏執する妄見で

238  
ある、第八の邪見は、原因結果の道理を撥無する妄見で、一切の妄見は、皆顛倒して生ずる故、共に邪と名くべきのに、唯この因果の道理を撥無する妄見に、邪見の名を附するは、これ其過失甚だ重きからである、第九の見取見とは、前の身見偏見邪見等を執取して、是れ眞なり實なり勝なり等と偏執する妄見である、自他諍論を起して、自己の妄執する僻見を以て眞實と爲し、他の執する見を非實とするが如きは、多は此見に屬す、故に此見取見は、鬪諍の所依となるものである、第十の戒禁取見は、此に二ありて、一に因にあらざるを因と計し、二に道に非ざるものを道と計するのである、佛敎に説く所の五戒十戒等は、涅槃の果を證得する遠因となれども、直に涅槃の果を證得する親因でない、然るに之を執して、出離解脱の親因なりと計し、或は拔髮等の苦行は、生天の因にあらざるに、之を執して眞實最勝の道と計するが如きは、皆此戒禁取見といふものである、此十種の根本惑の中、前の貪瞋痴慢の疑五を、五鈍便と名け、後の身見、偏見、邪見、見取見、戒禁取見の五を、五利使と名く、蓋し此十種の根本惑は、皆吾精神界内にありて、吾人を使役するからである、而も此五利使五鈍使の中で、其上首となるものは何れかといへば、大乘敎では有身見なりとすることである、身見は梵語の薩迦耶見で、支那に譯して取有見と云ひ、日本では我れが我れが、物じやと思ふ心である、此我れが我れが物

じやと思ふ利己的精神あるから、百般の迷妄心起き來ることでありて、不道德の依りて起る本源は、實に此身見であるとするのである。此身見に愚痴や貪愛の伴ふてあることは、云ふまでもないことである。

此根本惑に隨從して起き來る枝末惑は、俱舍論第二十一卷已下に委く示すが如く、放逸、懈怠、不信、惛沈、掉舉、無慚、無愧、忿、覆惱、疾、憊、誑、諂、害、憍、恨、睡眠、悔等種々ありて、此等の我が心内に起伏して、吾人をして迷界に沈淪せしむることである。

斯の如く輪廻の主體を動かすものは、精神上では惑即ち煩惱であれども、此惑のみでは主體を動かすことは出來ぬ、直接主體を動かすものは、其惑より發する業である、然らば其所謂業とは如何なるものか、これより少しく業を説かねばならぬ。

抑も業に就ては、思業、思己業と稱して、之を二に分つことが出来る、其思業は心の業でありて、思己業は心に思ひ已りて身體言語の上に顯はる、業である、それ故、此思業、思己業の二を開て、身語意の三業とすることが出来る、思業は即ち意業でありて、思己業は身業と語業である、此身語意の三業更に開くときは、五業となる、一に思業、二に身表業、三に身無表業、四に語表業、五に語無表業である、近く俱舍論十三丁初に

世別由業、生、思及思所依、思即是意業、所作謂身語、乃至此身語二業、俱表無表性

とあり、吾人今將に一事を爲さうとして、先づ心中に種々思考するは意業である、其種々思考する意業が、外部に發動して、身體の上に現はれて種々の所作あるは身表業、言語の上に現はるゝは語表業である、其身語の表業を起すと同時に、原因結果の法則として、將來その結果を招くべき原因を自己の身中に撃發す、その撃發せる原因は無形無象でありて、此に在り彼に在りと他に表示すること無き故、之を身無表業又は語無表業と名くるのである、此身語の無表業あるから、自己の主體を動かして、輪廻轉生止むことなからしむるのである。

此に就き、吾人に身語の二の表業のあることは能く知り得れども、身語の表業以外に、更に身語の二の無表業を立つることは甚だ知り難し、如何といふに、凡そ原因あれば必ず結果あるべきことは、何人も否定することは出來ぬ、今吾等が身體を動作して、善若くは惡の身語の表業を作らば、其表業力によりて、將來之に對する結果を招ねかねばならぬ、然るにその身語の表業は、結果を招くまで現存するといふべきか、彼は念刻々生滅して、暫くも停住せざるものである、其停住せざる身業語業が、如何にして結果を招感し得るか、無より有を生ずと云ふは、普通論理の許さざるばかりでなく、殊に佛教々理に於て許さざる所である、果して然らば身語の表業は、其動作を止むと同

時に過去に落謝しても、他に之が結果を招くべき原因となるものを、自己の身申に留存せしめねばならぬ、而も能く留存せしむるから、將來其結果を招感することを得るのである、斯る所以あるゆへ、身語の表業以外に、身語の無表業を別立するのである、此は且らく佛教々理の大體に就て説く。

時に此表業には必ず、無表業あるかといふに、表業のみありて無表業なき場合がある、その故は、表業にして強盛なる善若くは惡なるときは、必ず無表業あれども、善にも惡にもあらざる無記性の身語の表業には、無表業ないことである、之を専門學上より云へば、無表業に凡そ三種ありて、一に律儀無、無二に不律儀無表、三に非律儀非不律儀無表である、此中律儀の無表は善でありて、不律儀の無表は惡、非律儀不律儀の無表は、律儀の善と非律儀の惡とにあらざる處中の善惡である、此初の律儀の無表に又三種ありて、別解脱律儀無表、靜慮律儀無表、無漏律儀無表とである、別解脱律儀無表は、五戒八戒十戒二百五十戒等の戒律を受けて、別々に身體言語の過非を捨棄して得る無表である、靜慮律儀無表は、靜慮は定でありて、人此定に入れば、自然と身體言語の過非を遠離する故、定と俱に得る無表である、無漏律儀無表は無漏の善心起れば、善心起ると共に身體言語の過非を遠離するゆへ、無漏と共に得る無表である、而して別解脱律儀



前表によれば、律儀の中の靜慮、律儀と無漏、律儀には、表業無くして無表業あることになりてをれども仔細に觀察するときは、唯靜慮、律儀と無漏、律儀とに表業なくして無表業あるばかりでなく、別解脱戒の中にも、自然得見諦得と云ふものに至りては、表業なくして無表を得とし、又不律儀に於ても、表業より生ずるあり(作)或は表業より生ぜざるものがある(作)仙人意憤の如き、仙人自身は、身體を動さず、言語を發さざれども、殺生罪を成すとするゆへ表業なくて無表業を得と云はねばならぬ。

既に業に表業無表業ありて、能く其結果を招得すと云ふことを説くされど、何れの時何かなる業が其結果を招くか未だ知るべからず、依之更に時間に就て業の感果力を一言せねばならぬ、凡そ感果の時節に、過去、現在、未來がある、其未來の中に、直ぐ未來次生と未來の其次の未來とがある、その直ぐ未來次生を順生と云ひ、未來の其次の未來已後を順後といふ、吾人現在に業を造りて、現在に其果を招くを、順現業と名け、又現在に業を造りても、現在に其果を招くことなく、未來次生に其果を招くを、順生業と名け、又現在に業を造るも、現在に其果を招くことなく、又次生にも其果を招かずして、次生以後に至りて招くを、順後業と名くることである、此順現、順生、順後の三業は、結果を招く時節は一定してあれども、或る一種の造業にして、何れの時に結果を招くか、一定

せざるものがある、之を順不定業と名く、此順不定業に二類ありて、其招くべき結果として、何者なるか既に一定してあれども、招くべき時節に就ては、一定せざるものと、又時も結果も共に一定せざるものがある、前を報定時不定といひ、後を報時俱不定と名くることである、古來此順現順生順後不定の四業を立つるものを四業家と稱じ、又此四業の中第四の順不定業を開て二とし、前の三業に合して五業を立つるを、五業家と稱することである、俱舍論では此四業家の説を善なりとして評取してある。

此四業に於て、何れの業が總報を引き、何れの業が別報を招くや、換言すれば、人の人と云はるべき果報はこれ總報にして、其總報の上に更に男女貴賤好醜等の別あるはこれ別報である、其總報を招く業は何者にして、又別報を招く業は何者なりやと云ふに、*婆娑論百十四*<sup>十六</sup>に曰く、

問此順現法受業等、幾能引衆同分果、幾能滿衆同分果、或有說者、二能引衆同分果、亦能滿衆同分果、謂順次生受業、順後次受業、二能滿衆同分果、不能引衆同分果、謂順現法受業、順不定受業、復有說者、三能引衆同分果、亦能滿衆同分果、謂除順現法受、一能滿衆同分果、不能引衆同分果、謂順現法受、復有欲令順現法受業、亦能引衆同分果、若作是說、此四種業、一切皆能引衆同分果、及滿衆同分果。

之に依れば三説ありて、第一説は、順生順後の業力は、總報と別報とを招けども、順現

順不定の二業は、唯別報を招き得るに過ぎずし、第二説は、順生順後不定の三業は、各總別を招けども、順現業の一は、唯別報を招くとし、第三説は、順現順後等の四業は、何れも總別を招くことを得としてある、然るに俱舍論十五<sub>丁十五</sub>には、

能引唯三、除順現受、現身同分、先業引故

とありて、娑婆論三説の中の第二説を取り用てある。

最もその總報を引く業の勢力に就て、大小乗教説く所異なりてある、薩婆多部ては一業引一生多業能圓滿と稱して、總報を引く業は唯一生を引くに止まるとすれども、大乘教は一業引多生多業能圓滿と稱して、總報を引く業は唯一生を引くに止まらずして、或は二生三生をも引く事もありとすることである、これたゞ大乘教のみでなく、小乗教の一派たる經量部でも、一業多生を感ずとすることである。

此の如く業の勢力に就て、現在に其果を招くもあれば、未來に其果を招くもあり、又未來の中にも次生に直に招くもあれば、次後生に招くもありて、而も其結果を招くに、總報を引くあり、別報を招くことあるゆへ、遂に鬼畜人天男女好醜等の別あるに至らしむるのである、今別善惡報應經上卷の初に、

爾時輪迴長者、白世尊言、一切有情、天壽長命、有病無病、端嚴醜陋、貴賤種族、聰明愚鈍、柔和麤穢、其

事非一、因果善惡報應云何、佛告輪迴長者言、乃至汝施善聽、一切有情、造種々業、起種々惑、衆生業有黑白、果報乃分善惡、黑業三塗受報、白業定感入天、又業有分限、命乃長短、等(氏八、六十六丁)

と云ふて、上下二卷に、涉りて、廣く如何なる業によりて如何なる果報を招くかを説てある、要するに吾人に惑と業とありて、其惑と業とが一大動力となりて、自己の主體をして此處より彼處、彼處より此處と輪廻轉生せしむるのである。

### 三 輪廻轉生の狀相

然らば其輪廻轉生の狀相如何といふに、漢語灯七五丁に吾人の將に生命の終らんとするに三種の愛が起ると説てある、其所謂三種の愛とは、一に自體愛二に境界愛三に當生愛である、自體愛は自己の身體を愛すること、一生涯大切に心を寄せ來りし身體を、今將に捨てんとするのであるから、自己の身體に向て愛着が發るのである、境界愛は品物に向て發る愛で、壯健の時代には、家が大切である、倉が大切である、田地田畑が大切であると、心を碎き來りしものが、今將に生命終らんとするのであるから、其品物に向て愛念が起るのである、又當生愛は當に生れんとする當來世に對して起る愛でありて壯健の時には、誰一人鳥や獸や魚に爲らんと望むものはなければ、今將に

生命の終らんとする時には、其當來生れんとする鳥や獸や其他の生に向て、愛念の起るのである。此三種の愛の中、前の二愛の起るべき事は、疑ふ程のことなけれども、當生愛の起るといふは解し兼ねることである。なれども、これ畢竟前に述べたる自己の主體にやどりある業力が、我生命の終らんとする時に活動して、其果を招くのであるから、業力の然らしむる所であると云はねばならぬ。然して其業力によりて當來世を招かんとするや、四有輪轉と稱して、死有、中有、生有、本有と次第することである。死有は今將に生命の終らんとする最後臨終の一刹那である。中有は其死有より、來世母の胎内に託するに至るまでの間に受くる有情の身體である。此中有に就て大乘教小乘教其説を異にして居る。小乘教中薩婆多部では、吾人は死有の後必ず中有ありとしてあるが、大衆部、一説部、説出世部、鷄胤部等では、都て中有無しとして居る。訶梨跋摩の造れる成實論も亦其如くである。然に大乘教では、薩婆多部の如く定て有りとせず、又大衆部等の如く定て無しともせず、畢竟有無不定とすることである。何となれば、極善極惡には中有無しと云ふて、最も勝れた善業や最も猛しき惡業には、死有の後生有の結果を引くこと速かであるから、中有なるもの無けれども、其他の善又は惡の業力には、來世の果報を招くこと猛烈且つ迅速でないから、死有の後中有ありとするのである。今且ら

く死有の後中有ありとして、其狀相を説くに、凡そ生に胎卵濕化の四生ある中、中有は唯だ化生でありて、胎生でもなければ卵生でもなく、從て亦濕生でもない、而して其量は、人にありては恰も五六才の童子の如しといふて居る、されど至極微細なる物質を以て組織せられて居る身體であるから、肉眼を以ては見ることは出來ないが、極淨なる天眼を以ては見ることを得ると云ふてある、而して此中有に住する時間に就ても、種々の説ありて、或は極少時の間なりとし、或は七日間に過ぎずとし、或は七々四十九日の間なりと云ひ、或は長短不定なりと云ふて居る、而して其中有を去りて將に生處に至らうとするに當りては、業の勢力至りて強き故に、如何に之を遮らうとしても遮ることは出來ぬ、それ故生るべき因と縁と和合すれば、人の中有は必ず人趣に行き牛馬犬鶏の中有は必ず畜趣に行て生るゝことである、而して其中有のものが、更に中有に没して母の胎内に托し來る、其托胎の初念を生有といふのである、其生有の母胎に托してより後、漸々増大し、月滿て母胎を出で、人間一生の壽命の將に終らんとする死有に至るまでの間を本有といふのである、此本有の間に、胎内の五位胎外五位と云ふことがある、胎内の五位は、一に羯刺藍、二に頰部曇、三に閉戸、四に健南、五に鉢羅奢迦である、羯刺藍は凝滑又は和合と譯し、托胎已後初七日の間である、頰部曇は胞と譯し、第

二の七日の間である、閉尸は血肉と譯し、第三の七日の間である、健南は堅肉と譯し、第四の七日の間である、鉢羅奢迦は支節と譯し、第五の七日已後出産に至るまでの間である、又胎外の五位とは、一に嬰孩、二に童子、三に少年、四に盛年、五に老年で、嬰孩は出産已後六歳に至るまでの間を云ひ、童子は七歳より十五歳に至るまでの間を云ひ、少年は十六歳より三十歳に至るまでの間を云ひ、盛年は三十一歳より四十歳に至るまでの間、老年は四十一歳已後を指すのである。

斯く死有より中有に至り、中有より生有に至り、生有より本有に至り、其本有に於て煩惱を起し業を造るから、本有より死有、死有より中有、中有より生有、生有より本有と次第して、輪廻轉生暫くも止むことないのである。

更に十二縁起に就て之を見れば、輪廻轉生の相一増明了なることである、其十二縁起とは無明、行、識、名色、六處、觸、受、愛、取、有、生、老死でありて、此中第一の無明とは、宿惑と稱して、過去前世に起せし煩惱を總稱したるものである、第二の行とは、行は行業と熟して、過去前世にありて造りし諸の業力である、第三の識とは、過去前世に在りて起造せし無明行の因によりて、現在此世に母胎に托し來る結生の初念である、此初念は、前に説きたる四有の中の生有でありて、此位は色心二法の中、心の力偏に勝るゝから、此結

生の初念をたゞ識と名けたのである、第四の名色は、結生已後凡そ四周間餘でありて、之を名色と名くるは、名は心である、此位にては胎内にあると久しからざるから、身體支節が完全せぬばかりでなく、心の作用も劣りてあるから、此位の色心を指して、たゞ名色と名けたのである、第五の六處とは、前に説く胎内五位の中の鉢羅奢迦の位でありて、前の名色已後出胎に至るまでの間である、此位では身體支節已に其形をなし、眼耳等の六根處創て圓滿するから、六處と名けたのである、第六の觸は、出生已後凡そ二三年の間で、此間は心識の發達未だ十分でないから、猥りに外界の水火刀劍等にふれて、身體を傷くることあるから、唯觸と名けたのである、第七の受とは、四五歳から十二三歳までの間で、此間では心識次第に發達して、此の如きこと爲せば、苦である、樂である等と、苦樂の因の差別を知れども、未だ貪婬を起さぬから、たゞ受と名けたのである、第八の愛とは、十四五歳前後の間でありて、此間では貪愛婬愛資具愛等を起せども、未だ甚しきに至らぬから、たゞ愛と名く、第九の取とは、取は貪である、年漸く長ずれば、上妙の資具を得しが爲めに、多少の危険のことありとも、それを冒して四方に追求することから、取と名くるのである、此取と前の愛との二は、共に煩惱でありて、前の無明と同じことである、第十の有とは、前の貪愛の力によりて、能く未來當有の果を招く業力を指

すのでありて、業力は能く當來の果を有するから有と名けたので、即ち前の行と同じことである。第十一の生とは、前の愛取有の起惡造業によりて、未來に生を招く結生の初念を指すので、前の識と同じことである。第十二の老此とは、未來結生已後死に至るまでの間でありて、即ち前の現在世の名色、六處、觸、受の四法を未來世に總じて老死と云ふのである。

然れば十二緣起の中、無明行の二は過去世の起惡造業でありて、現在世の果を招く原因であり、識、名色、六處、觸、受の五は過去の起惡造業によりて招く現在世の結果である。又愛取有の三は、過去世の無明行と同じく現在世の起惡造業でありて、未來世の果報を招く原因である。又生老死の二は現在世の起惡造業の原因によりて招く未來世の果報である。それ故之を三世兩重の因果と稱することである。

此三世兩重の因果では、現在世の方には因果共にあれども、過去世の方には原因ありて結果なく、又未來世の方では結果のみありて原因はないから、一寸思ふと過去には其始めあるが如く、未來には其終りあるが如く見れども、既に過去に無明行の因あれば、此無明行を引き起すには、生老死の結果ありしなるべく、又未來世に生老死の結果あれば、更に亦無明行の原因を起すべしと、現在世の因果廣説に比して例知せしむ

ることである、故に過去の前に過去あり、未來の後に未來ありて、之れが最初の發端も無く、最後の末端も無いことである、此の如く、過去の無明行の因によりて、現在世の識名色六處等の五果を招き、又現在の三因によりて、未來の二果を招き、輪廻轉生止むことなきことである。

以上述べたる、十二緣起は、大小乗教何れにも説けども、且らく小乗教の意に依りて之を説明せしことで、若し大乘教の意を知らんとせば近くは成唯識論を見るべし、即ち成唯識論八十丁己下に、三十唯識論の、

山語業習氣、二取習氣俱、前異熟既盡、復生三餘異熟<sup>三</sup>

とある一頌を解するに、四の復次釋が出してある、その第三の復次釋に、十二緣起を以て説明してあれども、今は煩を厭ふて此に述ぶることを避け、たゞ少しく實大乘教の意に依りて、更に吾等が迷ひ來る始末を一言しやうと思ふ。

抑も吾人が輪廻轉生と迷ひ來るは何に由るかといへば、宇宙遍滿の大眞理たる眞如を眞如の如く有りの儘に見ること能はざるに由る、其眞如を有りの儘に見ること能はざる者を根本無明と名く、此根本無明起きて眞如を有りのまゝに見ること能はざれば、隨て種々なる妄想分別の念を生じ來る、之を枝末無明と名く、此枝末無明の始

終を總括して、三細六塵と稱することである、其所謂三細六塵とは、三細は業相、能見相、境界相でありて、六塵は智相、相續相、執取相、計名字相、起業相、業繫苦相である、業相は根本無明が眞如を有りのまゝに見ること能はざる時、此に始て妄想心起る、其妄想心の起點を業相と名くることとて、業は動轉を意味するものである、能見相は、根本無明が起きて、妄想心起動し來ると共に、主容の見起る、其主觀的作用を能見の相と名くるのである、境界相は其主觀的作用に對する客觀的對象を指すのである、又智相は既に主觀的作用によりて客觀的對象を變現せしのであるから、此對象は心内に現せる如幻假有のものである、然るに之に對し、心内所現と知らずして、心外實有と誤認するから、其物に對して貪欲瞋恚等の種々なる妄想分別の心を起す、之を智相と名くるのである、相續相は前の智相の妄念分別が漸々相續して止まざるを云ふのでありて、前の智相と此相續相とは、共に一切萬物の眞相に迷惑して起る法執と云ふものである、執取相は前の法執分別の妄想心生じたる後に、更に我れがと執着する人執の煩惱を起すのである、計名字相とは前の人執の煩惱が益増大すると共に、心の中に善惡好醜の種々なる名稱をつけて、或は愛し或は憎むと云ふ情を起すを云ふのである、起業相は既に内心に種々なる妄念煩惱を起すから、それが更に身體言語の上にあらはれて種々な

る業を造るのである。業繫苦相は既に種々の業を造るから、其業力によりて招く所の結果である。此結果の上に、更に法執を起し人執を起して、惡業を造るから、吾等は無始已來輪廻轉生して止むことなしと云ふのである。

此の如く實大乘に於ては、根本無明起きて、眞如を如實に知る智明なきによりて、妄想分別の念を生じ、人法二執交も續起して、惡業を造るから、恰も環の端なきが如く、過去より現在、現在より未來と展轉して、迷を重ねるとするのである。

#### 四 輪廻轉生と佛教

既に煩惱と業とによりて輪廻轉生する趣を述たり、然るに之に對し、吾人は如何にして解脱し得るかの問題が起る。是に於て解脱の方法を説かねばならぬ、之を説く前に、先づ以て佛教の大體を一言するの必要がある。古來説く所に依れば、釋尊は十九出家三十成道し、五十年間宣説せられたる教は、華嚴阿含方等般若法華涅槃であり、此等の諸經の教は要するに輪廻の迷を解脱する法を説かせられたとである。其中華嚴經は成道已後最初三七日の間、智慧勝れたる利根の者に對して、高尚なる法即ち自己所證の有り儘を説かせられたれども、其聽衆の大多數は如聾如啞にして、何かなるこ

とを説かせられたか全く知ること能はぬゆへ、遂に會座を退去せり、それ故釋尊は之の三七日の説法了るや、機根を調熟する爲めに、更に十二年間、所説の法を低くして、説法せられたが、今日傳はる所の四部の阿含經即ち是である、此阿含經の説法によりて、聽衆の智識は次第に進歩して、次の方等八ヶ年の説法となりた、此方等八ヶ年が濟みて次に般若の會座となり、二十二年間諸法皆空の旨を説かれた、彼の六百卷の般若經も、又一卷の般若心經も、共に此會座に屬する法である、此二十二年の般若の會座が濟みて、次に八ヶ年間に法華涅槃を説かせられた、之を古來阿含十二方等八、二十二年般若談、法華涅槃共八年、華嚴最初三七日と申して居る、勿論これは一應の觀察でありて、尅實して之を論ずれば、各時處に種々の法を説かせられたことである。

此釋尊五十年間の説法を大別すれば、小乘教大乘教の二となること、阿含は小乘教、其他は大乘教である、其大乘教の中にも、此土入證と他土得生の別ありて、此土入證は此世に於て悟を開かんとする教であり、他土得生は他土へ往生して證りを開かんとする教である、即ち前者は此世に於て輪廻轉生の因となるべき煩惱業の力を斷滅せんとし、後者は他土へ往生して之を斷たんとするのである、此小乘大乘の二教及び大乘中の此土人證と他土得生とを概括すれば、聖道門の教と淨土門の教となる、小乘

教及び大乘教の此土人證得果は聖道門の教でありて、大乘教の他土得生は淨土門の教である、其聖道門は即ち自力教でありて、淨土門は他力教である。

然らばその淨土門他力教は、何れの處に在りて説てあるかといへば、阿含經を除きたる其他の大乘教には、殆んど之を説かざるなしと云ふてよろしい、今且らく根本法輪と稱する華嚴經に就て見るに、華嚴經には六十卷、八十卷、四十卷の三部の經がある、其中六十華嚴經に依れば、一經總じて八會三十四品がある、第一は寂滅道場會にして、此に世間淨眼品盧舍那品の二品がある、第二は普光會にして、此に六品がある、第三は須彌頂會にして、此に亦六品があり、第四は夜摩天會にして、此に四品あり、第五は兜率天會にして、此に三品あり、第六は他化天會にして、此に十一品あり、第七は普光堂重會にして、此に一品あり、第八は祇園重閣會にして、此に亦一品あり、即ち入法界品である、此八會三十四品に如何なることを説くか、第一會に二品ある中、世間淨眼の一品には、一經の起る因縁を説き、盧舍那品には、佛陀所得の果報の廣大なるを説きて、先づ人をして信仰の念を生ぜしめ、第二會より第六會に至る五會には、十位十住十行十廻向十地妙覺の六位の因果を説きて、修因感果の道理に於て深く解頌を起さしめ、また第七會には、更に六位の行法に托して實踐窮行せしめ、又第八會には、佛菩薩の教により

て、進みて法界の眞理に悟入することを説てある。それ故賢首は探玄記第二初丁に第一會の世間淨眼品を教起因縁分と名け、盧舍那品を擧果勸樂生信分と名く、第二會より第六會に至る五位三十品を修因契果生解分と名け、第七會を託法進修成行分と名け、第八會を依人入證成徳分と名てある。然れば此經の所説の法門、八會三十四品ありて、甚だ廣博であれども、要するに人をして信を生じ、解を起し、行を修して、法界の眞理に證入せしめやうとするにあることである。換言せば一經の要は信解行證の四字に出でぬとて、而も其信解行證の四字の中、更に其要を求むれば、唯法界の眞理に證入する證の一字にあることである。何ぜなれば、信を生せしむるも、解を起さしむるも、又行を修せしむるも、要する所眞理に證入せしむるにあるからである。然るに其眞理に證入するには如何にすべきか、之を説きたるが即ち入法界品にして、此入法界品には、唯善財童子が知識を訪ひ法を求むることを説くのみである。而も其知識は總じて五十三人ありて、最初は文殊菩薩である。菩薩之に誨るに。

吾當爲汝說微妙法、卽爲分別諸佛法正法、分別諸佛次興世法、淨春屬法、轉梵輪法、諸佛色身相好清淨莊嚴之法、一切諸佛具法身法、諸佛音聲妙莊嚴法、說一切如來平等正法、

と云ひ、更に勸むるに餘の知識に親近すべきを以てす、故に童子は其勸めに従ひ、更に

遍く四方に遊て、功德雲、善住、彌伽等の知識を歴訪し、最後に普賢菩薩に値ふて要法を懇求す菩薩童子に誨るに、

願我臨<sub>レ</sub>欲<sub>二</sub>命終時<sub>一</sub>盡除一切諸障礙<sub>二</sub>而見<sub>三</sub>彼佛阿彌陀<sub>一</sub>即得往生安樂刹<sub>二</sub>我既往<sub>三</sub>生彼國<sub>二</sub>已<sub>一</sub>現前成<sub>三</sub>就<sub>二</sub>此大願<sub>一</sub>等

とあり、普賢菩薩の誨る所此の如し童子此教を聞て、成佛得脱の要法は唯西方往生にありと確信し、更に他に要法を求むることなさず、之を以て一經の終結としてある、若し夫れ善財童子にして普賢の教に満足せないならば何ぞ更に他の善識を訪はざるや、既に他の知識を訪ふことなし、これ佛道に種々あれども、成佛得脱の要法は唯西方往生にありと信じたからである。

是に由りて之を觀れば華嚴經は高妙なる佛陀所證の無盡法界の法門を説きて、人をして之に證入せしめやうとにあれども、其無盡法界の理に證入するには、容易のことでない、必ず無邊の萬行を修せねばならぬ、然るに其無邊の萬行を修することは甚だ困難であるから、更に他に之れが躑徑便路を求めねばならぬ、其躑徑便路は西方往生の易行道にありと、普賢の西方願生を以て、一經の終結としたのである、故に一方より見れば、無論聖道難行の法を説きたる經典なれども、又他の一方より見れば、西方往生の易行道を説きたる經典といふべきである、唐の賢首は釋尊一代の教を分けて、稱

法本教、逐機末教の二とする中、稱法の本教は即華嚴經でありて逐機の末教は其他の諸經であるとして居る、其稱法本教たる華嚴經に聖道と淨土の二門の教ありとすれば逐機末法たる諸經に、亦二門の教あるべきは當然のこと、云はねばならぬ。

更に之を歴史的に考ふるに、印度に於て大乘佛教の再興者たる馬鳴論師は、大乘起信論を著はして、大乘佛教の道理を通申した、其通申論に如何なることが説てあるかといへば、一部總じて五分ありて、第一は因緣分、第二は立義分、第三は解釋分、第四は修行信心分、第五は勸修利益分である、その因緣分は序分にして立義、解釋、修行信心の三分は正宗分後の勸修利益分は流通分である、而して其正宗分の中の立義、解釋の二分には一心二門三大の法を説き、修行信心分には四信五行が説てある、換言せば立義、解釋、修行信心の三分は、佛教の所謂理論と實行の二でありて、即ち立義、解釋の二分には、大乘なるものは外を求むべからず、我心即ち大乘の法體にして、具に體相用の三大を具足して居る、衆生之に迷へば流轉し、之を悟れば還滅する旨を説きて、眞如緣起の旨を顯示し、修行信心分には、我人苟も流轉の迷を脱して悟に歸入せんとせば、信仰の念を起し、實際に修行せねばならぬと説いたのである、然るに大乘の法體たる自己の心性を開顯するには、否我心の大乘の大乘たる所以の境遇に到達するには、必ず四信五

行を修めねばならぬ、然るに容易に之を修むることは出来ぬ、若修むること出来ざれば設ひ我心の本性が高妙なりとも、又我心の作用が偉大なりとも、其は唯理論に止まりて、實際に其域に到達することは出来ぬ、依て更に之れが捷徑便路を求めねばならぬ、是に於て馬鳴は、更に勝方便ありとして、西方願生すべき旨を説かれた、其文に曰く、

復次衆生、初學此法、欲求正信、其心怯弱、以住於此娑婆世界、自畏不能常值諸佛、親承供養、權謂信心難可成就、意欲退者、當知如來、有勝方便、攝護信心、謂以專意念佛、因緣隨願、得生他方他土、常見於他、永離惡道、如修多羅說、若人專念四方極樂世界阿彌陀佛、所修善根、廻向願求生彼世界、即得往生、常見佛、故終無有退、若觀彼眞如法身、常勤修習、畢竟得生、住正定故、

此文甚だ僅少なれども起信論正宗三分の中、最後修行信心分の文でありて、而も其修行信心分の中で、此文を以て最後終結としてある、されば起信論は唯聖道自力の法を説くばかりでなく、亦淨土他力の法を宣説したるものと云はねばならぬ。

此の如く諸大乘教の根本法輪たる華嚴經にも、又印度の歴史上比較的古き起信論にも、佛教に聖道門と淨土門の二大部あることを示してあれば、佛教中に於て自力他力の二大門あること容易に知らるゝことである。

## 五 自力教の解説

佛敎に自力と他力の二敎ある中、自力敎の解脱即ち自力敎によりて如何に解脱し得るかを述ぶるに就て、自力他力の語を少しく述べて置かねばならぬ、世に論者ありて、萬物は因縁和合して生ずるものであるから、純自力もなければ純他力も無いことであると云ふ、是れは何かにも尤もの事であるが併し佛敎には因縁相奪といふことありて、因の力を因に奪ひ、或は因の力を縁に奪ふことがある、縁の力を因に奪ふときは純自力となり、因の力を縁に奪ふときは純他力となる、故に因縁和合と云ふと共に、一面に純自力を許し、又他の一面に純他力の義を許さねばならぬ、且らく之を菩薩の論部に見るに、印度の世親論師の著された十地論第八丁八に、十二有支の次第相生の因縁を説き明すに四句を作る、

一 縁不<sub>レ</sub>生自因生故

二 因不<sub>レ</sub>生縁生故

三 不<sub>二</sub>共生<sub>一</sub>無<sub>二</sub>知者<sub>一</sub>故

四 不<sub>二</sub>無因生<sub>一</sub>隨縁故

此中第一句は、因を以て縁の力を奪ふから、唯因より諸法生ずとし、第二句は、縁を以て因の力を奪ふから、唯縁より生ずとし、第三句は、第一句の縁不生と第二句の因不生とを並べ取るから、共より生ぜずとし、第四句は、第一句の自因生と第二句の縁生とを

並べ取るから、因縁和合して諸法生ずとしたのである、又種集論第四十三に、縁起の甚深なることを示すに亦四句が出してある。

一 自種有故不<sub>レ</sub>從<sub>レ</sub>他

二 待<sub>レ</sub>衆緣故非<sub>二</sub>自作<sub>一</sub>

三 無<sub>レ</sub>作用故非<sub>二</sub>共生<sub>一</sub>

四 有<sub>レ</sub>功能故非<sub>二</sub>無因<sub>一</sub>

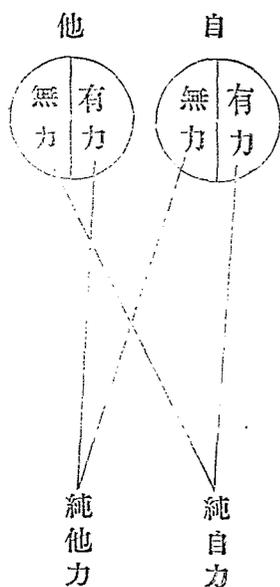
此中等一句は、十地論の第一句と同じく、諸法他に從はずして唯自因より生ずとし、第二句は十地論の第二句と同じく、諸法生ずる時必ず他の縁を待つから唯縁より生ずとし、第三句は、十地論の第三句の如く、第一句の中の不從他と第二句の中の非自作とを並用するから、其より生ずとし、又第四句は、十地論の第三句と同じく、第一句の中の自種有故と第二句の中の待衆緣故とを並用するから、因縁和合して諸法を生ずとするのである。

斯く十地論及び雜集論に四句を作りて、其第一句に、諸法唯因より生じて縁より生ぜずとするから、純自力の義あり、又其第二句に、因の力を縁に奪て、諸法唯縁より生ずとするから、純他力の義がある、既に諸論に因縁相奪の義を説く、此意味に於て純自力あり純他力ありといふも、何の妨ぐる所か之れあらん、然るに特更純自力も無く純他

方も無し杯といふは、要するに、因縁相奪といふことに思を致さざるからであると言はねばならぬ。

然して更に進みて其因の力を縁に奪ひ、或は縁の力を因に奪ふは何故なるかと云ふに、凡そ萬物には有力と無力との二點を具ふて居るものである、例へば茲に十人あり其中の一人を總代に立てたとせんか、他の九人は無力となり、選ばれた一人は有力となる、又他の一人を選んで總代とすれば、更に其人が有力となる、されば一己人の上に有力の點と無力の點とがある、之を一家族に就て見るに、主人は外に向て全有力なれども、時には亦無力となる、下婢が臺處に在りて飯を焚く時は、下婢が全有力でありて、主人は寧ろ無力である、又銀行や會社に就ても容易に之を知ることが出来る、十萬圓の會社を立つる時に、もし其内より一圓の金を引き去れば、十萬圓の會社は成立することば出来ぬ、一圓は十萬圓に對しては至りて僅かなれども、十萬圓中の一圓は有力である、之と同じく、他の一圓は、其他の金に對して亦有力で、餘は無力である、佛教々理に、須彌芥子相入と云ふことがある、即ち須彌が芥子に入り芥子が須彌に入ると云ふことであるが、須彌と芥子とは、其形狀大小に於ては比較すること出来ぬ程違ふけれども、前の道程に依れば、須彌が芥子に入り芥子が須彌に入ると云はるのである、何

せなれば須彌が須彌として安然として存するは、須彌と芥子とが天地の間に、秩然として空間を占有して居るからである。然るに空間より芥子を除去去るとせんが、空中に一大動搖を生じ、其動搖の影響として、須彌も亦安全たることが出来ぬ道理である。されば芥子は至りて小なれども、須彌をして安然たらしむるも、又安全たらざらしむるも、一に芥子にあるゆへ、須彌は無力にして芥子は有力なりと云はねばならぬ。既に須彌は無力芥子は有力なるゆへ、無力は有力に攝せられて、須彌は芥子に入ると云はねばならぬ。芥子が須彌に入ると云ふことも之に反して知るべし。斯の如く萬物に各有力と無力の二點を具ふ、而して自力他力といふは、其自己の有力と他の無力を相對しては純自力となり、又他の有力と自己の無力を相對すれば純他力となる事である。



自力教は此純自力に發足して、自己の本性を開顯せんとし、他力教は純他力に依順して、自己の無力と他の有力とを認め、以て淨土に往生して、其目的を達せんとするのである。

扱て其自力教に依りて如何にして

解脱し得るか、此には小乗教にも大乘教にも種々の方法ありて、一概に述ぶることは出来ぬ、特に各宗各派の所説の如きは、到底此に詳述するの邊はまいから、今は唯大乘教の大體に就て、一言しやうと思ふ。

彼の輪廻轉生の動力たる煩惱業を撲滅するには發願と修行とが最も必要である、發類は立志で修業は實行である、其發類に就て四種あり、一に衆生無邊誓願度、二に煩惱無邊誓願斷、三に法門無盡誓願知、四に無上菩提誓願證である、古今東西を通じて多くの立志傳はあるも、恐く此四弘誓願程の大なる立志はあるまい、第一衆生無邊誓願度とは衆生は舊譯の語で、新譯では有情といふ、我等人類のみならず苟も情識を有するもの、皆衆生と稱する事である、此衆生は實に無邊で、其無邊なる衆生を皆悉く救済せんと云ふ大願である、第二の煩惱無邊誓願斷とは、煩惱は我等が身心を惱亂するもの、其惱亂する煩惱は、其根本と枝末とに行き涉りて之を數ふれば遂に無邊となる、其無邊なる煩惱を悉く斷滅せんと願ふのである、第三の法門無盡誓願知とは、宇宙萬法は皆心を以て識知せらるべきものである、其識知せらるべき萬法に對して、悉く知り盡くさふと云ふ願である、第四の無上菩提誓願證とは、菩提は道で、無上道を我身に證得せんと願である、輪廻を解脱するには、先づ以て此誓願を起さねばならぬ、此誓願

を發すと共に之を徹底するには、必ず一大修行をせねばならぬ、其修行は所謂六度の行でありて、布施、持戒、忍、禪、定、智慧である、此中第一の布施は、此に財施、無畏施、法施の三ありて、財施は財物を他に施與すること、無畏施は他に精神上の安慰を與ふること、今日流行する慰問などは、此無畏施に屬するものである、法施は他の爲に説法教化すること、此布施をなすに付て三輪の相を亡すと云ことがあつた、三輪は能施、所施、所施物の三で、受者に對して愛情の念なく、施者自身に於て敢て慢心を懷かず、又施物に於て憐愍の心を起さず、總て幻化露電の如しと知りて有相を離るゝことである、第二の持戒はこれに三種ありて、一に攝律儀戒、自己の身口意の三業に於て誤りのなき様、戒律を受持すること、二に攝善法戒、凡ての善根を我身に修さめんとすること、三に攝衆生戒、一切衆生を濟度せんとすること、持戒には此三施を具足せねばならぬ、第三忍、とは此に亦三種ありて、一に耐怨、害忍、怨敵の害に遇ふとも、之に報ゆるに害を以てせず、却て彼を愍て捨ぬを云ふ、二に安受、苦忍、寒熱飢餓等の一切の苦痛に遇ふとも、更に恐怖や倦怠の念なく、甘んじて苦を受ること、三に諦察、法忍、甚深微妙の法たる眞如の理に諦達する心である、忍、禪には此三種の忍耐が無ければならぬ、第四精進とは、善事に向て猛烈に進む心で、此に三種あり、一に被甲精進、恰も勇悍なる兵士が、甲冑を着

して軍に従ふが如く、勇猛の心を起し、大果を成せんが爲に邁進すること、二に攝善精進、大々の一切の善法を積み修むること、三に利益精進、努めて衆生を利益すること、精進には此三種の精進がなければならぬ、第五禪定とは、定は靜慮とも云ふて即ち坐禪のこと、此に三種ありて、一に安住靜慮、法樂に安住すること、二に引發靜慮、禪定を以て天眼天耳等の六神通を引發すること、三に辨事靜慮、有情利益の事業を辨して、能く飢寒等の苦を止息せしむること、禪定は唯心を一境に止めて寂靜ならしむるのみでなく、此三種を具せねばならぬ、第六智慧、此に亦三種ありて、一に生空無分別慧、我なりと迷執する我見を空する智慧である、二に法空無分別慧、これは諸法實有と迷執する其法執を空する智慧のことである、三に俱無分別慧、これは我と法との二の迷執を俱に空する智慧である、智慧は唯我を空すればかりでなく、又法を空するばかりでなく、我も法も俱に空なりと悟る眞實の智慧を起さねばならぬ。

斯く布施、持戒、忍、禪、精進、禪定、智慧の六度の行を修して、始て輪廻轉生の業繫を免るゝことが出来るのである、然るに此六度の行を修することは、口に云ふことならば至りて易けれども、實際に我身に之を行ふに至りては、洵に容易のことでない、是に於て他力教の解脱の教が起さ來るのである。

## 六 他方教の解脱

惟ふに萬物は因果の法則によりて生じ、又因果の法則によりて滅することにて、設ひ最極微細なる一小事物の、一念一刻の小時間でも、尙此法則を脱することは出来ぬ、故に人若し自己の原因にして不善であれば、將來必ず不善の結果を招き、善なれば必ず善果を招くものでありて、其關係は一系も紊れぬことである、それ故諸佛は、衆生濟度の通則として、諸惡莫作衆善奉行自淨其意と教へらるることである、然るに吾人々類の實際を見るに、智愚善惡の別ある中、智者よりも愚者多く、善人よりも惡人多く、利根の者よりも鈍根の者多くして、畢竟諸佛の教網に攝取せらるゝものは、其少數の賢者或は善人でありて、其多數の愚者は、到底輪廻を解脱することは出来ぬ、是に於て彌陀の因位法藏菩薩たりしとき、無邊の大悲坐視するに忍びず、起て其愚者不善者を救濟せんとし、而も救濟するには、彼等に對し、輪廻を解脱すべき廣大の願を起し、無邊の行を修せよと勸めても、到底彼等の耐る所でないから、其耐へざるものに對して之を強ふるも、更に益する所がない、それ故寧ろ自身に於て、能く彼等を救濟し得べき最大易行の要法を成就して、衆生に廻施せんには、若かずと覺悟し、大願を起し、大行を修せ

られたのである、其大願大行によりて、我等が輪廻轉生を解脱すべき要法は成就せられて、それを我等衆生に廻施せらるゝことである、其廻施せらるゝ其者を我身に獲得せば、我身に大願を起し大行を起すこと無げれども、既に與へられた其ものが偉大の作用あるから、我等が無始已來輪廻轉生と迷ひ來りし煩惱惡業は、爲めに斷滅せらるゝのである、例へば茲に、醫科大學を卒業せし一人の醫士あり、情ら世間を見るに、肺病其の他の病に罹りて死するもの甚だ多きを歎き、如何にして彼等を助け得べきかと卒業已後凡そ二十年間若くは三十年間一意専心、寢食を忘れて研究に研究を積み、工風に工風を凝らし、一種の靈藥を案出したりとせよ、病人には、別に研究することも無く、工風を凝らすことなけれども、與へられた藥を服すれば、病氣は忽ち癒る、是れ何故なれば、藥の中に二十年間若くは三十年間の丹精苦勞が、悉く封じ込められてあるからである、今亦其如くでありて、佛の手元に出來上りた要法の中には、永劫の長の間修行せられた大善根大功德の全體が、封じ込められてあるから、我等衆生の方に、別に思案工風を凝らさゞれども、與へられた念佛が多善根多福德であるから、無始已來作りたる惡業煩惱を斷除して、輪廻轉生を解脱することが出來るのである。

我國念佛の元祖法然上人は、九歳にして父を喪ひ、深く無常の理を悟り、父の遺命に

從て觀覺得業の弟子となる、觀覺上人の器量非凡なるを見て、近衛天皇の久安三年、叡山西塔なる持寶房源光の下に送る、其狀に曰く、進上大聖文珠像一軀と、源光試みるに、果して觀覺の云ふ通り非凡でありた、乃ち四月八日、當時の碩學功德院の皇圓に就て學ばしめ、十一月四日剃髮受戒せしめた、時に年十五歳である、それより深く天臺の教觀を學び、二十四歳にして、出で、遍く諸宗の碩德を叩き、到る處所見を述て是非を質す、然るに其説多く先哲未發の卓説なるゆへ、諸師みな其造詣の深さに驚きたことである、是の如く修練愈ること無りたれども、出離の要道未だ得る所無く、遂に黒谷の報恩藏に入りて、一切經を披閱すること五回、支那光明寺の善導の觀無量壽經疏を見ること前後八回でありた、其結果終に散善義の中にある僅か三十四文字に眼がついて、これこそ一代佛敎の眼目、七千餘卷の肝要此にありと知りて、出離生死の大道をあきらめられたことである。其所謂三十四文字とは、

一心專念彌陀名號、行住坐臥、不問時節、久近、念々不捨者、是名正定之業、願彼佛願故、

である、聖覺法印の著はした十六門記左十に、此時のことを述べて、

歡喜のあまりに、きく人もなかりたれども、聲をあけて、予が如き下機の行法は、阿彌陀佛の法藏因位の昔、かねて定め置かるゝをやと、高聲に唱て、感悅隨に徹り、落涕千行なりき、

といふてある、是れ法然上人四十三歳の時である、それより以後念佛の一行に心を寄せ、他力教に依りて解脱を期せられた、選擇本願念佛集の本願章に、難易對勝劣對の二を以て、念佛が布施持戒等の自力の行に比して、大に勝るゝ旨を示してある、其中勝劣は、法體に就て、念佛は勝れ諸行の劣ることを示し、難易は機に就て、念佛の修し易く、諸行諸善の修し難きことを示してある、其文に曰く、

初勝劣者、念佛是勝、餘行是劣、所以者何、名號者萬德之所歸、然則彌陀一佛所有四智三身、十力四無畏等一切內證切德、相好光明、說法利生等一切外用切德、皆悉攝在阿彌佛名號之中、故名號切德、最爲勝也、餘行不然、各守一隅、是以爲劣也、譬如世間屋舍、名宇之中、攝棟梁椽柱等一切家具、棟梁等一々名宇中、不能攝一切、以之應知、然則佛名號切德、勝一切切德、故捨劣取勝、以爲本願、歟、次難易義者、念佛易修、諸行難行、是故往生證讚云、問曰何故不令作觀、直遣專稱名宇、有何意也、琴曰乃由衆生障重、境細心廉、識隱神飛、兒難成就也、是以大聖悲憐、直勸專稱名宇、正由稱名易故、相續卽生上、乃至故知、念佛易故、通於一切、諸行難故、不通諸機、然則爲令一切衆生、平等往生、捨難取易爲本願、歟、若夫以造像起塔、而爲本願者、貧窮困乏之類、定絕往生望、然富貴者少、貧賤者甚多、若以智慧高才、而爲本願者、愚鈍下智者、定絕往生望、然智慧者少、愚痴者甚多云云

斯の如く諸行と念佛と比較して、諸行は劣にして難であるのに、念佛は勝にして易であるから、輪廻轉生の繫縛を切りて解脱し得るのは、念佛の一法と覺悟せられたのである、此法然上人の教を受けたものは、聖光、證空、源智、幸西、隆寛、親鸞等多くありた、就

## 中親鸞上人は、其教を相承して、

親鸞にをきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおほせをかうむりて、信ずるほかに別の仔細なきなり、念佛はまことに淨土にむまるゝたねにてやはん、へるらん、また地獄におつる業にてやはんへるらん、總してもて存知せざるなり、たとひ法然上人にすかさされまいらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ、そのゆへは、自餘の行をはげみて佛になるべかりける身が、念佛をまうして地獄におちてさふらはばこそ、すかさされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかそかし、彌陀の本願まことにおはしまさば、釋尊の説教虚言なるべからず、佛説まことにおはしまさば、善尊の御釋虚言したまふべからず、善尊の御釋まことならば法然のおほせそらことならんや、法然のおほせまことならば、親鸞かまふすむね、またもてむなしかるべからず、さふらふか、詮するところ、愚身の信心におきてはかりのことし、このうへは、念佛をとりて信じたてまつらんと、またすてんと、面々の御はからひなりと云云、

と云はれ、絶對他力の信仰を主張せられた、念佛は諸善に比して勝であり易である、それ故、念佛は稱へねばならぬと稱ふることに力を用ゆる間は、未だ自力的臭味が全然去りたとは云へぬ、そこで設ひ念佛を稱へずとも、佛より廻向せらるゝ名號を、我が心腑に獲得せは獲得した其時に、生死を出離すべき約束成立して、迷ふことの無き身の上となるのである、換言すれば、稱ふることは末でありて、信することは源であ

る、其稱ふる末に於て、輪廻を解脱すべき約束が成立するでなく、其聲の發する源たる信に於て、既に其約束が成立するものとするので、洵に徹底的見解といはねばならぬ。

某はまたく善もほしからず、また惡もおそれなし、善のほしからざるゆへは、彌陀の本願を信受するにまさる善なきがゆへに、惡のおそれなきといふは、彌陀の本願をさまたぐる惡なきがゆへに、

とは、これ又親鸞上人の語である、全體善のほしいといふは、善を未だ我身に得ぬからである、又惡をおそるゝといふは、惡其者にさまたげらるゝからである、然るに自己の心の中に、本願を信ずると同時に、萬善圓備の嘉號たる名號が我がものとなりたなら、善として此善以外に求むべきもの無く、惡として其善を妨ぐる程のものないから、善もおしからず、惡もおそれなしと云はれたのである、他力信仰の極致は實に此である、彌陀の本願を信ぜざる己前は、善もほしく惡も大に恐るれども、他力の大道を信じた後は、我身の佛となるべき絶対善は、信ずると同時に我がものとなり、此我ものとなりし絶対善は、如何なる罪惡といへども妨ぐることは出來ぬから、恐るゝ心も求むる心もなくするのである、上人九歳の春出家し、二十年間叡山に學問せられたのは、惡をおそれ善を求むるからである、然るにいかに其惡をおそれ善を求めても、自己の輪廻す

べき罪惡は容易に滅することは出來ず、無上菩提に至るべき勝善亦容易に得られぬから、永き悶煩悶苦痛に沈みしも、絶待他力の教を聽て、信念を確立せらるゝや、善惡の外に超然として、歡喜踊躍の念禁じ難く、所謂手の舞ひ足の蹈む所を知らざりしことでありた、これ即ち信仰の一念に、如來廻向の絶待善を我身に得られたから、更に求むべき善もなく恐るべき惡もないからである。

之を要するに、自力教に於ては、自己の有力の點を認め、飽迄自己に鞭て奮勵努力し、輪廻轉生の繫縛を切りて、涅槃常樂の境に到達せんとするにあれども、他力教に於ては、自己の無力と佛の有力の點とを認め、茲に己れの全無力を知りて佛の全有力に歸し、佛の力によりて輪廻の繫縛を斷ち切り未來成佛の果を得んとするのである。

上來述ぶる所、佛教に於ける輪廻轉生と解脱とに就て、其大體を一言したに過ぎぬ、特に自力教の解脱他力教の解脱に就ては、各宗各派の分れ來る所でありて、容易に述べ盡くさるべきものでない、今は唯輪廻と解脱に就て、佛教に於て如何に取り扱はれつゝあるかを示さん爲に、從來考ふる所を秩序附けしたるに過ぎぬ、各項の詳細なることは更に他日を待たねばならぬことである。